遠藤周作学会　会報

第15号

2020年10月10日

発行　遠藤周作学会

代表　川島秀一

特別寄稿
総会報告
事務局より

◇　特別寄稿

遠藤周作学会は二〇二〇年度、創設十五年を迎えた。また今年六月には、長崎市遠藤周作文学館に寄託されていた資料の中から未発表作品「影に対して」の原稿が発見されるという、遠藤周作研究に携わる我々にとって大変刺激的なニュースも飛び込んできた。

それを記念して、学会代表の川島秀一氏、長崎市遠藤周作文学館の川﨑友理子氏から会員の方々に向けたメッセージをご寄稿いただいた。

【遠藤周作学会代表・川島秀一氏】

「学会の十五年を振り返って」

■亡きある若者の話――遠藤文学とのふとした出会いから、それまでの女性自衛隊員の職を辞し、東京の某大学に編入。以来三年にわたる遠藤文学との苦闘が始まる。問われたのは、長い間彼女の宿痾と化したかのような〈人生〉の意味をめぐる悲痛な問い。その間、彼女はカトリックの洗礼を受ける。そして、卒論に選んだのが『深い河』。作品との闘いは壮絶なものであった。命を賭して書きあげられた卒論には、激しい文字の乱れと幾つもの涙の染みがあったという。自身はその卒論を形見のようにして、卒業直後、呼吸不全でその短い生涯を閉じる。いま、その若者の魂は聖イグナチオ教会の地下納骨堂に眠っている。

■私たちの〈遠藤周作学会〉は本年度創設十五年を迎える。その歩みを振り返りつつ、遠藤周作という作家に深くかかわり続けようとする学会の意味と役割についてその思いを新たにする。その若者にとって、遠藤文学の〈言葉〉はまぎれもなく〈いのち〉の確かな糧であったとともに、壮絶な闘いを強いる劇薬でもあった。文学という〈言葉〉の栄光と悲惨。そのような人生を横にして、

私たちの《研究》とは何かをあらためて考えさせられる。常に私たちは「研究者」として冷静さを装うように見えるのだが、その若者に課したに違いない〈言葉〉の激しい熱情と畏れは、また研究者のものでもなければならぬ。研究とは、何かについての情報ではなく、いのちの交わりとしての〈言葉〉を伝達することであろう。

■この十五年にわたる学会の継続は、佐藤泰正先生、笠井秋生先生など多くの先達の働きに負うところが大きい。あらためて深く感謝申し上げる次第。現在の会員一〇三名。決して多くはないが、遠藤文学の〈言葉〉が持つ熱情と畏れを身に刻みつつ、日々研鑽に励むことになる。過ぎた十五年、そしてこれから刻まれるであろう新たな十五年という時間、その困難にも臆することなく、〈文学〉という〈言葉〉の原点を見つめて進んでいこう。

【遠藤周作文学館・川﨑友理子氏】

「影に対して」発見と企画展」

長崎市遠藤周作文学館では開館二十周年記念として、令和二年七月一日（水）より令和三年六月三十日（水）まで「遠藤周作珠玉のエッセイ展――〈生活〉と〈人生〉の違い――」を開催。遠藤の生涯と人生観の深まりをたどり、真摯に、時にはユーモアを交えて綴られたエッセイの魅力を紹介する。本展は〈信じること〉〈苦しみ〉〈遊び〉〈老いと死〉の四部構成。また、エッセイの中で取り上げられることが多かった〈「第三の新人」との交友〉についても一部紹介している。未発表小説「影に対して」の草稿と秘書による清書原稿は初公開（全文は「三田文學」夏季号に掲載。また、十月末には新潮社から本作を含んだ短編集『影に対して 母をめぐる物語』が刊行される）。

「影に対して」の発見について述べる。当館では開館以来、資料整理を進めており、すべての原稿を保存袋および保存箱に入れて目録化した上で、掲載誌等の調査をしている。今回、企画展で紹介するエッセイの原稿を探すために未調査の箱の中に入った原稿を確認していたところ、本稿を発見した。資料の詳細については「三田文學」等を参照されたいが、秘書による清書原稿に書かれた題字（題字と署名は本人）を見ると、「燭影」という文字が消しゴムで消された跡が残っており、当初の題「燭影」から「影に対して」に変更されたことがわかることを新たに記す。

本展の図録も販売中（Ａ４判、本文三十六頁、頒価千円）。部門解説、展示資料の図版や解説、「影に対して」の概説と共に、遠藤文学の魅力や〈遊び〉の世界の本質

に迫る寄稿も収録している。とくに〈「第三の新人」との交友〉の章では、遠藤と阿川弘之と吉行淳之介が昭和三十年代に少女雑誌「りぼん」で連載した小説の誌面や、庄野潤三遠藤周作あて葉書、吉行淳之介遠藤周作あて書簡などを初掲載しているので注目していただきたい。当館ショップ、または通信販売（現金書留、送料は着払い）でご購入いただけます。

◇　総会

第十五回二〇二〇年度遠藤周作学会・全国大会は、新型コロナウィルス肺炎感染予防のため中止となった。それに伴い、今年度の総会はメール会議の形で行われた。

まず、二〇一九年度事業報告がなされた。内容は次のとおり。

◆　『遠藤周作事典』は現在、鼎書房による項目データの組版用データの作成を完了した。作業が順調に進めば二〇二〇年一月～二月中に刊行の予定。

◆　第十四回二〇一九年度遠藤周作学会・全国大会を長崎市出津地区公民館にて開催。会員二十九名の他、一般の聴講者の参加が多数あった。翌日には国際芥川龍之介学会・遠藤周作学会・長崎市立図書館の共催となる国際学術会議を長崎市立図書館にて開催。会員三十三名の他、芥川学会の会員を含む一〇〇名以上が参加した。

◆　機関誌『遠藤周作研究』第十三号発行。第十三号は、国際学術会議の講演二本と報告、六篇の論稿、一篇の書評、北田雄一氏による研究展望、ヴァン・C・ゲッセル氏とマーク・ウィリアムズ氏による「遠藤周作英文参考文献目録」を収録。

◆　会員数は、二〇二〇年九月時点で一〇三名。

◆　笛木美佳氏により二〇一九年度の会計報告がなされ、承認された。

続いて、事務局より二〇二〇年度事業計画が示された。内容は次のとおり。

◆　二〇二〇年度は役員改選の年に当たるが、全国大会が中止となり、役員会・総会もメールでの開催となったため、改選は一年延期する。

◆　機関誌『遠藤周作研究』次号（第十四号）募集要項等はこれまで通り。

◆　二〇二一年度の大会は、二〇二一年九月十一日（土）に南山大学で開催予定。

◇　事務局より

▼例年ですと「会報」のトップには、全国大会の記事が掲載されますが、残念ながら、二〇二〇年度は中止となりました。けれども二〇二〇年は学会にとって大切な記念の年です。快くご寄稿くださった川島秀一代表、川﨑友理子氏に感謝申し上げます。

▼機関誌『遠藤周作研究』第十四号の投稿論文を募集します。投稿申し込みは、十二月末までに事務局へお願いいたします。機関誌の最後にある投稿規定をご覧のうえ、会員の方々の意欲的な投稿が多く寄せられることをお待ちしています。

▼次回の研究発表の申込みは来年五月末日締切りです。三月に改めて募集のお知らせをいたします。

▼次回の大会は、中止となった第十五回大会の開催校であった、金承哲氏が所属される愛知県の南山大学で行われます。愛知県は、遠藤が戦国三部作の執筆において刺激を受けた『武功夜話』が発見された地であり、作中にも度々登場します。今年度は多くの学会が中止となり、研究発表や情報交換の場がなくなったことで、研究を通じた交流の機会を強く望んでいる会員の方々も多いことと思われます。来年度こそは多くの学会員が集い、充実した研究発表がなされ、盛会となりますことを期待します。

▼最後に学会員の方々にご協力のお願いがあります。機関誌の「遠藤周作参考文献目録及び研究展望」は、次号も北田雄一氏が担当されますので、遠藤周作に関する会員の方々の論文はもちろん、入手できた参考文献についての情報を、北田氏に直接お知らせください（E-mail: kitada.y0116@gmail.com）。また、これまでの参考文献目録について遺漏のある場合も、ご連絡をお願いします。

（文責　会報担当　古浦修子）

遠藤周作学会 事務局
〒154-8533
東京都世田谷区太子堂1-7-57 昭和女子大学
日本語日本文学科 笛木美佳研究室内
TEL: 03(3411)5019
E-mail: f_mika@swu.ac.jp